

詩篇 77 篇

0 指揮者のために。エドトンの調べによって。アサフの賛歌

A. 嘆き

《神への叫び》

- 1 私は神に向かい声をあげて、叫ぶ。私が神に向かって声をあげると、神は聞かれる。
- 2 苦難の日に、私は主を尋ね求め、夜には、たゆむことなく手を差し伸ばしたが、私のたましいは慰めを拒んだ。
- 3 私は神を思い起こして嘆き、思いを潜めて、私の霊は衰え果てる。セラ
- 4 あなたは、私のまぶたを閉じさせない。私の心は乱れて、もの言うこともできない。

《見失った恵み》

- 5 私は、昔の日々、遠い昔の年々を思い返した。
- 6 夜には私の歌を思い起こし、自分の心と語り合い、私の霊は探し求める。
- 7 「主は、いつまでも拒まれるのだろうか。もう決して愛してくださらないのだろうか。
- 8 主の恵みは、永久に絶たれたのだろうか。約束は、代々に至るまで、果たされないのだろうか。
- 9 神は、いつくしみを忘れたのだろうか。もしや、怒ってあわれみを閉じてしまわれたのだろうか。」セラ
- 10 そのとき私は言った。「私の弱いのはいと高き方の右の手が変わったことによる。」

B. 賛美

《救済史の想起》

- 11 私は、主のみわざを思い起こそう。まことに、昔からのあなたの奇しいわざを思い起こそう。
- 12 私は、あなたのなさったすべてのことに思いを巡らし、あなたのみわざを、静かに考えよう。
- 13 神よ。あなたの道は聖です。神のように大いなる神が、ほかにありましようか。
- 14 あなたは奇しいわざを行われる神、国々の民の中に御力を現される方です。
- 15 あなたは御腕をもって、ご自分の民、ヤコブとヨセフの子らを贖われました。セラ

《被造物の畏れ》

- 16 神よ。水はあなたを見たのです。水はあなたを見て、わななきました。わたつみもまた、震え上がりました。
- 17 雲は水を注ぎ出し、雷雲は雷をとどろかし、あなたの矢もまた、ひらめき飛びました。
- 18 あなたの雷の声は、いくさ車のように鳴り、いなずまは世界を照らし、地は震え、揺れ動きました。
- 19 あなたの道は海の中にあり、あなたの小道は大水の中にありました。それで、あなたの足跡を見た者はありません。
- 20 あなたは、ご自分の民を、モーセとアロンの手によって、羊の群れのように導かれました。

これまでに見てきた多くの詩篇の構造と同様、本篇も「嘆き」から「賛美」へと向かっています。しかし、読者はまずそのような分析的な目で読み始めるのではなく、詩人が真っ向から神に向かって叫ぶ姿、彼の苦悶の現実に目を留め、心を合わせるべきでしょう。それは、私たち自身が苦しみの中にあるとき、思考が混乱し、時には錯乱状態になり、髪の毛を掻きむしって転げ回る姿と重なります。ほかならぬ一人の信仰者が、神の愛を見失ってこのような状態に陥っているのです。

前半部分（A）は、更に二つの内容に分かれます。まず《神への叫び》から。「声をあげる」「叫ぶ」「尋ね求める」「手を差し伸ばす」といった一つひとつの動詞から、詩人が如何に神を求めてアプローチを続けていたかが痛ましいほど伝わってきます。どのような問題に直面していたのでしょうか。共同体の問題か、個人の問題か。詳細は分かりませんが、詩人にとって人生の暗黒の時期を過ごしていたことは間違いないでしょう。

2節後半の「私は慰めを拒んだ」とか、3節の「神を思い起こして嘆き、思いを潜めて、私の霊は衰え果てる」といった表現は印象深いです。ヤコブは最愛の息子ヨセフを失ったとき、慰められることを拒みました（創世37:35）。人に慰められたくないということではありません。しかし、今はまだ慰めを受けることを自分自身が許さないのです。神からの深い慰めが来るまでは。神を思い起こすことが、むしろ嘆き・悩みとなり、衰え果てることになるとも言います。このような信仰者の姿を安易に「不信仰」と呼ぶことはできません。答えてくださらない神に真正面から対峙し祈ったことのある人にしか分からない感覚でしょう。詩人は神の答えを見出すことができず、夜も眠れないほどだったのです。

（A）の後半部分《見失った恵み》では、まず一瞬だけ過去の平和だった頃に目が向きます。「遠い昔の年々」「(幸いだった)私の歌」と。嗚呼、あの頃は幸せだったなあ…と、夜な夜な涙を目に浮かべて懐かしんでいる詩人の姿が思い浮かびます。しかし、7節以下では再び現実が迫ってくる。「…か」という自問自答が、7～9節の中で6回も繰り返されます。神との契約関係が断たれてしまったのではないかと不安に苛まれていたのです。「拒まれる」「愛してくださらない」「恵みは永久に断たれた」「約束は…果たされない」「いつくしみを忘れた」「怒ってあわれみを閉じてしまわれた」と、神の御顔が見えなくなった人間の恐怖が綴られています。

内村鑑三も、死ぬ間際まで「もしかしたら私は救われていないのではないかと…」とこぼしていたそうです。あの日本が誇る信仰者にも神との関係が見えなくなることがあるのです。そんな内村に、ある宣教師は「あなたが言っていることは、植物を何度も植木鉢から引き抜いて、根っこがあるかどうかを確かめているようなものですよ」と諭していたそうです。

後半部分（B）も、更に二つの内容に分かれています。前半《救済史の想起》で、詩人はハッと我に帰りました。神が過去に何をなされかたを思い出したのです。イスラエルにどれほど大きな憐れみをかけてくださったか、彼は聖書を通して学んできていました。御言葉が心に蓄えられているか否かは、まさしく人生に希望を見出せるかどうかを決定づけます。

13節の「道」とは、神がどのようにご自身の民を救われるかの方法を指します。私たちキリスト者にとって、それはキリストの十字架による贖いです。「わたしは道であり、真理であり、いのちで

ある」(ヨハネ14:6)という主イエスのことばが思い起こされます。更に「聖」という言葉は、汚れなく近づきたい神の栄光を表します。神はエジプトに対して十の奇蹟をもって、ご自身の栄光を現されました。「ヤコブとヨセフ」(15節)とは「イスラエル全体」を指す表現であり、神が契約関係に基づいて大いなる救いの御業を成し遂げられたことを力強く宣べ伝えています。

(B)の前半部では、イスラエルに対する神の救いの御業について語られていました。しかし、残りの部分《被造物の畏れ》では、一挙に視野が広げられ、被造世界全体が神を畏れる姿が描かれます。ここから先は、これまで頻出していた「私」という言葉はもはや出てきません。目の前の問題ばかりを見て苦しんでいた詩人は、最終的なゴールとは神に栄光が帰されることだという原点に立ち返ったのです。

ここには「水」という表現が繰り返し出てきます。これは天地創造の「原初の水」を指すのでしよう。神がことばを発せられると、それに従わないものはない。水がわななくという表現は不思議な感じがしますが、神の息吹によって天上の水、地下の水は揺れ動き、海を形成したことを言い表しているのでしょう。「わたつみ」という日本語自体をあまり使うことがありませんが、原文では「深み」という語が使用されています。海の深淵を指すと思われる。その他「雲」「雷雲」「矢」「雷」「いなずま」などの表現は、世界の初めの頃に起きた自然界の大変動を詩的に現しているでしょう。19節の「あなたの道」「あなたの小道」とは、人間が居住することのできる大地ができたことを言っているのか、あるいはモーセが率いるイスラエルの民が通れるよう紅海を分けられた神の御業を指すのかは定かではありません。

いずれにせよ、詩人の目は、自分の人生の問題から、イスラエルの救済へ、そして最終的には天地創造という壮大な神の御業へと向かって行ったのです。

最後に20節はこじんまりと、主が牧者となってイスラエル民族を導いていかれたことをもって締めくくられます。激しい天地創造の内容からストーンと落ちてしまった感じがしなくもありません。しかし、ここにも詩人の意図があります。偉大な神に対して広げられた視野から、再び自分の人生に慈しみをもってご介入くださっている主の愛と恵みに思いを馳せたのです。浮き沈みの激しい詩ではありましたが、苦しみの直中にある人が最終的にどこに心を向けるべきかが順序立てて教えられている一篇でありました。